

教員養成学部生における教職選択・ 非選択の判断の解明

若松 養亮*

Decision-making about Selecting or Not-Selecting Teaching Profession for Faculty of Education Students

Yosuke WAKAMATSU

キーワード：教育学部生、進路意思決定、教職

問題と目的

大学に進学したほとんどの人は学部教育が最終学歴となり、大学院進学をする場合も、修士課程修了後の進路は大まかには見通しての進学となる。その意味で、大学生のうちに職業選択を行うことは必須である。しかし本格的に働いた経験のない大学生にとって、職業選択の意思決定は困難な課題であろう。仕事をする事自体のイメージもアルバイト経験に由来するものに限られるうえに、業種・職種は多岐にわたり、内情はわかりにくい。偶発的に決まる部分も少なくない。

しかし教員養成学部はその点、身近でイメージも明瞭な「教職」が想定できる学部である。さらには佐藤（1998）が指摘した「教育という文化的実践の『創造性』と個人の人生に関与し公共の幸福に貢献する『倫理性』（人道性）」というわかりやすい魅力もあって、教員養成学部は志願者・入学者とも多い。本学においても一般入試（前期）において過去3カ年をみると2.3～2.9倍の出願倍率である。

しかし近年、教員養成学部生においても卒業後の職業選択として教職が敬遠される傾向が指摘されている（教員養成のフラッグシップ大学検討ワーキンググループ, 2019）。その背景として、また課題解決への途として改善すべきこととして、マスメディアも指摘する教員の労働環境の過酷さ（朝日新聞, 2019a; 2019b）がある。働き方改革や「定額働かせ放題」（齊藤, 2019）と言われる給与の見直しも模索され（朝日新聞, 2023a）、負担軽減が提言される（朝日新聞, 2023b）などしている。

ただこれほどまでに問題視されている労働環境の問題が、学生にとってどのように受け止められて教職が敬遠されるかは究明すべきであろう。というのは、同じように労働環境の過酷さを知り、実習等で体験もしていても、教職を強く志望する学生もいるからである。また過酷な労働環境という点では、教職を敬遠した結果として選択される民間企業でも、税を原資としない経営形態ゆえに教職と同様に、あるいはそれ以上に過酷な可能性があるからである。彼らが「過酷な教職」を避けたならば、同等以上に過酷な民間企業のなかからどのような意思決定を行ったのか、またその他の理由の場合も含めて、「教員になるための学部で学んだ」というキャリア・パスを変更をするだけの何があり、それをどのように受け止めたのかは明らかになっていない。

本研究では、以上の問題意識から、教員養成学部生の教職をめぐる進路意思決定にどのような判断や思考があったかを解明する。具体的にはまず、過酷であると知りながら（実習等で見聞・体験もしながら）も、教職を選択した学生の判断や思考を明らかにすることを第1の目的とする。次に教職以外の職業を選択した学生が、広く膨大な選択肢のなかから、教職の途を棄てつつも、必ずしも教職の

* 滋賀大学

ように職務や内情が明瞭でない選択肢が膨大にあるなかから候補となる進路を絞り、決めていく際の判断や思考を明らかにすることが第2の目的である。これらの知見はまず、教員養成学部のキャリア形成支援にとっての実践的意義をもつ。なぜなら、教職の過酷さをどのように受け止め、自身のキャリア選択に適切に反映させていく指導に寄与するであろうし、あるいは大学や社会の側からも教師の労働環境の改善の必要性を発信していくことに寄与するからである。こうした実践的意義以外にも本研究は、青年が職業選択に求める意味の一端を解明するという学術的な意義がある。過酷とされる職業にも就業を求める青年、あるいはそれまでのキャリアと異なる領域に進もうとする青年、あるいは内情やキャリア・パスがよく見通せない職業のなかから1つを選んで就業しようとする青年の心性を明らかにすることは、青年が社会とどのように関わりを持とうとするかを明らかにすることに寄与するであろう。

これらのことを明らかにするために、教員養成学部の4年次生に面接調査を行った。量的調査では、研究者側が予めもった枠組から制約をうけ、また個々の判断にある心情や価値観をケースに応じて質問することが難しいからである。4年次生を対象としたのは、就職活動や採用試験への出願に伴う最終的な進路意思決定を終えた人から話を聞くためである。彼らに対して教職志望を中心とした職業選択肢の推移と、教職を選んだ（選ばずに他の職業を選んだ）理由の意味や背景を尋ねることによって、上記のことを明らかにしていく。

方法

1. 調査の概要

本学の教育学部の卒業前の4年次生に、卒論発表会を済ませた時期から卒業式前までの期間を想定して、面接調査への協力を呼びかけた。対象者の選定に際しては、教員を目指すか否かで迷った学生を紹介してほしい旨をすべての専攻の教員に依頼した。各推薦者から紹介された学生に著者から連絡をとり、その結果、Table 1に示した教職選択者8名、教職以外の選択者7名から協力を得た。うち教職選択者2名は、比較の意味も込めて、迷ったことがない学生に依頼した。面接調査は個別に対面またはオンラインにて30分程度をかけて行った。実施期間は2023年2月13日～3月23日であった。

Table 1 面接調査の協力者一覧

略号	系統	性別	最終進路	教職の志望		
				入学時	3年実習前	4年4月時
T1	教職系	女性	迷って教員	未確定	できるだけ目指そう	ぜひ目指そう
T2	教職系	女性	迷って教員	目指そう	ぜひ目指そう	できるだけ目指そう
T3	教科系	女性	迷って教員	教師もいいかな	とりあえず目指そう	ぜひ目指そう
T4	教職系	女性	教員	ぜひ目指そう	ぜひ目指そう	ぜひ目指そう
T5	教職系	男性	教員	教師を目指していた	ぜひ目指そう	ぜひ目指そう
T6	教科系	女性	迷って教員	未確定	目指さない	できるだけ目指そう
T7	教職系	女性	迷って教員	なれたらいいかな	目指さない	ぜひ目指そう
T8	教科系	男性	迷って教員	ぜひ目指そう	ぜひ目指そう	できるだけ目指そう
N1	教科系	男性	迷って非教員	教師を目指していた	目指さない	とりあえず目指そう
N2	教科系	女性	迷って非教員	興味はあるが自信はない	できるだけ目指そう	目指さない
N3	教科系	男性	迷って非教員	教師を目指していた	ぜひ目指そう	目指さない
N4	教職系	男性	迷って非教員	教師を目指していた	ぜひ目指そう	目指さない
N5	教職系	男性	迷って非教員	気持ちは3割くらい	できるだけ目指そう	目指さない
N6	教職系	男性	迷って非教員	とりあえず目指そう	とりあえず目指そう	目指さない
N7	教職系	男性	迷って非教員	ぜひ目指そう	ぜひ目指そう	とりあえず目指そう

2. 事前調査

承諾した人には事前に Web 調査を依頼し、当日の面接に先だって回答してもらうことを依頼した。質問内容は以下の通りである。

- ① 教職（保育士を含む）を3年次6月の教育実習前と4年次4月時点で志望した程度（4段階）
- ② 4年次4月に想定していた進路の選択肢カテゴリー（複数選択）
- ③ 4年次4月に想定していた進路のうち最も目指すカテゴリーと、その具体（あれば）
- ④ 前問③で回答した職業を目指したいと思った理由（36項目×5件法）
- ⑤ 同職業について「希望する強さ」と「働いている自分イメージの明瞭さ」（10段階評定）
- ⑥ この春からの進路先（書けるところまで具体的に記述）
- ⑦ 「前問⑥のところ働くこと」に対する熱意、「楽しく働く」ことへの志向（5件法）

3. 面接調査

- ⑧ 大学入学時からの教職志望の変遷とその理由
- ⑨ 事前調査の④で高い（低い）評定がなされた項目について、その理由や背後にある思い
- ⑩（教職以外を選択した人には）そのなかからどのように方向を定め、決めていったか。
- ⑪（教職に進む人には）過酷と言われている教職でも自分がやっていこうと思うのはなぜか
- ⑫ 働くのは「他者のため」か、「自分のため」か。そう思う理由
- ⑬ 「楽しく働く」ことができそうか。どうなることが「楽しく働く」ことか

以上の質問を柱として、半構造的に行った。本論文の目的には含まれない質問もあった。

結果

1. 教職選択者における意思決定の経緯

設問⑨への回答から、教職を選択した人が有していた教育実習までの不安（Table 2）としては経験の少なさ（T1）や実感のもてなさ（T3）、あるいはもともとさほど教員を志望していない（T6）、責任の重さに不安になる（T7）などであった。実習を終えてからの不安（Table 3）は他者との比較（T2）や仕事の多さ（T6、T8）に由来していた。

実習によって気持ちが高まった経緯（Table 4）では、全ケースにおいて子どもからの反応を

Table 2 教職選択者における教育実習前の不安

T1:	前期入試で他大学が不合格で後期入試で滋賀大に came。学部を選ぶときに、教師になるという気持ちで確定できなかった。入ってから悩んでいる期間が続いていた。教育実習開始時点では観察実習ぐらいしか経験がなくて、まだ子どもたちと触れたことがないし、アルバイトなどで教える経験もなく、不安な思いを抱えていた。教育学部に入って教師の道が開けているなら目指そうかなと思いつつも、不安もあるし、悩んできたのもあったので、その志望度評定となった。
T3:	教育学部に入ったので「先生もいいかな」というふう感じていて、あまり自分的に教師という実感がもてなかったのも、企業との間で悩みつつであった。（何か引かかることがあったわけではない？）はい。（ここの学部を選んだのは「教師に」という理由ではなかった？）学校の勧めもあって、教育というのも興味はあったので「受けてみよう」というぐらいの。（昨今の学校教育現場に指摘される問題が気になっていたからではない、という理解でいい？）はい。
T6:	もともと大学受験先を考えるとときに教員養成学部の他に理系の学部を目指そうと思っていた。職業選択するうえでは資格があった方が安定して職に就けるのではということを家族で話していたし、他の学部を考え合わせて学力に合うところで選んでいた。そういう過程があって、そこまで（教職を志望するかは）まだわからなかった。
T7:	入学時点は「なれたらいいかな」ぐらいだったが、授業を受けたり小学校に実際行かせてもらうなかで、自分には無理かなと思って100%あきらめていた。（無理だから、やめた？）そう。向いていないと思った。（なぜ？）責任感が強い仕事ということと、もともとみんなの前に出るとするのが嫌いだったので、他の職業を探していた。

・ケースの略号と該当する回答を示した。カッコ内は調査者からの問いかけを表す（以下の表でも同様）。

Table 3 教職選択者における教育実習後の不安

T2:	実習を終えて不安の方が大きかった。(具体的には?)大学の授業のなかでの模擬保育でも感じたが、一緒に行った子がすごく上手にやっていたり、実際の先生の姿を見ていると自分が来年からこんなテキパキと仕事が出来るとかと思った。
T6:	教職がブラックだということを知っていたし、そういうところで教職志望は難しいと思っていた。
T8:	それまで生徒目線で教師を見ていたが、実習で学校現場に入って教師目線で見てみると、担当したのは授業だけであったが、教師は事務作業など授業以外にもすることが多くて、本当に大変なんだなあと思ったから。

Table 4 教職選択者における教育実習後の気持ちの高まり

T1:	実習では不安な気持ちを抱えていた分、準備をすごくしていった。模擬授業の経験もなかった分、教具や指導案をガチガチに固めた状態で臨もうと思った。家も遠かったのも、寝る時間も確保しながら体調を整えようと早くから準備した結果、他の人よりゆとりのある実習になった。他の人が指導案や教具であたふたしているあいだに子どもたちと関わる時間もとれたし、授業見学の時間も十分にとれた。実習先の先生の様子や子どもへの関わり方も見られた分、授業での声かけのしかたもわかって、けっこう授業も関わり方も上手くいって、成功体験を積めた。研究授業の先生からの評価も良いものが多かった。
T2:	子どもは…自分も楽しくやっているときには子どもも反応してくれたりしたので、「気持ちも大切だな」とすごく感じた。
T3:	今、部活指導員を高校でさせてもらっていたり、教育実習で部活動にいったときに、自分の専門のバレーボールを教えられる楽しさを知ったこと、子どもと関わるのが楽しいと思ったので、教師を目指そうと思った。バレーボールが好きな子が部活に入っていて、もっとどうしたらよいか教えて欲しいと質問されたり、その子たちができることを実感できたり、成長しているのを見られるのが楽しい。 生徒が成長していくという教師の魅力の点で将来性が感じられる。あと自分が成長していくことに将来性ももてる。
T4:	スクールサポーターで障害のある子と関わる人が多いが、朝などの用意ができない子どもに、支援員の先生が(それに手伝ってあげることが)子どものためになっていないよねと教えてくれて、はたらきかけ方を変えてみることでその子が「手伝って」って言うてくれたり「自分でできたよ」と言ってくれたりできるようになった。(それでもっと強くなったところの説明が欲しい)ひとつは、自分ならそんな先生になれるだろうという未来像が見えてきたこと、子どもがかわいいかこんなに成長するんだという驚きと感動があって、そこをもっと見たいという意欲が湧いてきた。 実習やサポーターをするなかで、子どもたちの姿が自分のはたらきかけで変わっていく瞬間を目にすることが数多くあったので「自分なら」と思った。 「子どもを大切に」という点で、視点が同じ方向を向いているのかなと感じたので。いじめのことを議論していても結論が同じ友人は教師を目指している人たちだった。(実習中などの実体験があったから?)実習先の先生に話を伺うなかで、答のない問いにもずっと議論ができたので、すごく楽しくて。(実習やサポーターを通して)教師をしている人たちへの信頼感や、一緒に仕事をしていくことに希望がもてたとか、そんな感じ?)そう。
T5:	(志望が揺るぎなかった源泉はどこに?)自分が教師の仕事をしていてしんどいとかという気持ちよりは「楽しい」と思う気持ちの方が大きいからかなと。(その「楽しさ」ってどんな楽しさ?)こっちは頑張った分だけ、子どもの反応が良くなる、それに応えてくれる。
T6:	自分が実習で教材開発や授業準備をして子どもたちが反応してくれた姿をみて、頑張ってた良かったと思ったし、反省も多く残ったので、つきつめてやってみたいと思った。自分が準備した分、子どもたちの反応が良くなったと感じたので、多少失敗しても、次にどう改善するかを考えて次に準備をすると次は満足できる成果が得られるのではないかと。
T7:	2回目の実習を終えたときに、自分でも、子どもたちが「楽しかった」と言ってくれたり、周りの人に支えられたのも大きかったけど「なんとかできるかもしれない」と思った。 実習前半の授業があまりうまくいかなかったが、後半の授業の前には先生たちが模擬授業をさせてくれて、その授業が子どもたちがずっと盛り上がり、その後またやってほしいと言われて良かったなあと思った。 (「その職業で働く人は自分と気が合うだろう」に「よくあてはまる」なのは実習中の経験から?)実習中もそうだが、この大学にいる教師を目指す人たちが良かったから。(それはどこでの接点?)何人かは入学当初からの仲良くなった人だが、たくさんの人と気が合うと思えたのは教採の面接練習をした人たちといたとき。
T8:	授業をして、わかってもらえた反応があると嬉しいし、実習の最後にかいてもらった感想で「わかりやすかった」「おもしろかった」とあってすごく嬉しかった。 あとは周りの人と仲良くできたのが結構大きくて、教採と一緒に受ける人とか同じ学校に実習に行った人と仲良くなったことはやっぱり教採を受けたい、一緒に頑張ろうというモチベーションにはなった。

・同じ人から複数の答が聞けた場合は段落を替えて示した(冒頭が1マス空いている;以下の表でも同様)。

Table 5 教職選択者における過酷とされる労働環境で働く所感

T1:	スクールサポーターでも、絶対にしなければならないわけではないこと（お世話になった先生に子どもと一緒にプレゼントを作っていたが、家でその続きをした）をしていても自分の時間として楽しめているなというところはあるので、（「そういう時間が自分の時間」という感覚は）少なからずある。
T2:	（プライベートにはあまり重きを置かない方？）多少は考えるが、そのときは自分のプライベート面までは考えていなかった。（今はどう？）今は仕事をしながら両立できたらいいなと思っている。
T3:	（教師を目指さない人から聞いた言葉に「割に合わない」があるが、あなたの場合は）多少は思うところはある。（「でも…」と思うんですね？）でも、やっぱり自分が成長できる職業に就きたいというのがある。（成長できる仕事だったら何でもいいわけではないですよね？）はい。（成長できる仕事の中でも「教師」というのは？）バレーボールを教えたいというのもあるし、進路指導…子どもが夢をもって卒業していく姿を見たいなと思ったので。
T4:	仕事をし始めると自分はそれ以外のことができないだろうと思う。性格的にそこに打ち込んでしまうので。だから自分の時間がとれるかはあまり重視してなくて、それが報われるかどうかで頑張りたいと思った。（この理由だけで教師の志望をやめようという人たちに「こう考えればいいのに」っていうことはない？）プライベートで学んだことを子どもたちに還元・共有するって考えた方がいいのに、と思う。（ただそのプライベートな時間をとれない、割に合わないという言い方があるが、それについてはどう思う？）確かに…って思う。（そういう考え方を私だったらしないな、というのがあるかと思ったのだが）そういうときに思うのは、どれだけしんどくても、学校に行ったらあの子たちに出会えるのにか、関わっている子どもたちがぱっと浮かんでくる…（その問いは）難しいですね。
T5:	（時間が仕事に浸食されていくみたいなことは別に気にならない？）全然気にならない。何なら仕事とってないということもある。自分がしたいことをしているみたい。（自分がしたいことばかりやっていることもできないので、したくない仕事に時間をとられていくのはいや？）休みのときにしたくないことはいやだが、できるだけ学校にいる時間に終わらせたいと思う。
T6:	（企業志望者の中には「（残業手当が付かない）教師の仕事は割が悪い」という人もいるが、あなたの場合はそう思わない？）その考えも確かにあるとは思いますが、これからの社会で改善してもらっては思う。でも「時間でお金をもらう」というところでは測れない職業だと思う。自分がいただいたお給料に見合う以上のことをするのも教師の役割のひとつかなと思うので。
T7:	自分は教師という職業自体を自分のプライベートとして楽しめるといえるか…もともとプライベートで子どもと遊ぶのを楽しめる人なので。
T8:	実習先の先生の話の借りると、卒業したときの笑顔、「ありがとう」と言われることで全てが報われるという言葉聞いて、確かに、子どもたちが笑顔でいてくれるなら頑張ってもいいなあと思いつつも、自分の時間もうん…というまだ自分の気持ちが整理できていない、迷っているところはある。（あと他に何か言えることは？）オンとオフのメリハリについては「教師のバトン」や実習先の先生に聞いてみると、自宅でも持ち帰りの仕事があるので、でもそれも子どもが笑顔になるためと考えると、やっても頑張れそうなのかなと思えますね。

手応えとする達成経験が報告された。他には、子どもの変化や成長に面白さを見出した（T3、T4）や実習先の教員や教職志望の同級生と気持ちが通じた経験（T4、T7、T8）が聞かれた。

過酷とされる教師の労働環境で働くうえでの所感（Table 5）を尋ねると、T2やT3、T6のようにあまり深刻に考えていないケースや、T1やT5、T7に見られるように、働く時間を自分の時間（プライベート）として楽しめるといえる発言も聞かれた。

2. 教職以外の選択者における意思決定の経緯

同じく設問⑨への回答から、教職以外の職業を選択した人の意思決定の経緯をTable 6にまとめた。教職の特性に由来するネガティブな側面としては責任の重さやしんどさ（N2、N5、N7）が多く、他には実際の職場でやっていくことに希望をもてなかった（N1、N3）ことや教職以外でも自分のやりたいこと・目標は実現できる（N4、N6）との見通しが挙げられる。また、N6に見られる「民間企業から教員には転職できるが、その逆は難しい」という非対称性は若松（2017）でも報告されたものである。

設問⑩教職以外で選んだ職業に決めた経緯や理由については、Table 7にまとめた。出会った人たちに感じた親和性（N4、N7）や、業績給を想定した上昇志向の生き方（N1、N4、N5）、また携わりたい仕事の内容が就職活動を通して見えてきた（N3、N6、N7）といったものが挙げられる。

Table 6 教職以外の選択者における教職を選ばなかった理由

N1:	何よりも給料に納得いかない。結局年齢で変わっていくものなので、やった分だけ報われるものではない。やろうと思えば子どものためにどこまででも出来る仕事で、自分としてもやればやるだけ子どものためになると思うが、意外と周りにはそうではなくて。実習後の気持ちマックスのときに、周りの人は「こんだけしんどいんだら、どんだけ楽にできるかが大事」と話していて、この環境でやっていけるのかなと。
N2:	実習に行って、自分がもともと要領の良い方でもなく、割り切って仕事することができなく、実習期間の仕事量と、「あの時に子どもにこう関わった方が良かったかな」と思い返すことが多くて、実際に働き始めたときに自分で自分を追い込んでしまっただなと思つて。(それは経験が少ないからとは思わなかった?) 実習も行き、スクサボにも行き、子どもと関わるのはやっぱり楽しいと思う反面、それが職業になって責任が伴うとなったときに、遊びで関わるのと仕事で関わるのでは違うかなと思つてしまった。 周りの子たちが教採に向けて頑張っていて、4月からこうしようあししよう頑張っているのを見ると、自分だけ少数派で、「本当にそれで良かったのかな」と思ったり、子どもと関わるのは楽しかったから…公園や登下校中の子どもを見ると「ああ可愛いな」と思う…でも実際自分が働くとなると、教える立場になると思うとやっぱり違うかなと。まだ揺らいでいる部分があるので、一回会社に入って、免許は持っているから、気持ちが変われば考え直すのはありなのかなと思つて。
N3:	教育実習がきっかけで、実際教壇に立って教えるとなったときに、生徒の学力が上から下まであって。自分としては、教育というものが「その子のやりたいことをさせてあげられるようにする」ものだと思うので、上の子どもでもヒマそうにしているも新しい課題をその子に与えるわけにもいかず、学力が良くない子にも時間的にサポートが仕切れない…妥協みたいなものが生まれてしまって、自分が考える「教える」とはそういうものじゃないと思つた。(4月から働き先ならば、やりたいと思う「教える」ことができる、という?) そう。塾の方がその子のやりたいことに集中して助けられる、というのがあって。 (実習先の先生に前述の自分の困り感を相談したりはした?) した。(その時のレスポンスで「救われたな」という感じはなかった?) そこで「ある程度は妥協は必要だよ」と言われて、「でもなんか違うかな」と思つた。
N4:	自分のやりたいこと、何のため働くのかなと考えたときに教職以外でも達成できるのかなと思つた。 (「自分の頑張りを認めてもらえそう」は教師だと?) 正直なところ教師は「頑張つてね」とかあまり聞かないような…。保護者からはクレームなど。
N5:	自分の過去の学校の先生との関わりで、けっこう良い先生に出会っているが、自分がそっち側になれるかという、先生の苦しい側面も見えて、先生って楽しくなさそう、忙しそうと伺えた。 実習に行くまでの想像以上にしんどさの部分がやりがいを上回ってしまったところがやめた理由としては大きい。(例えばどういうしんどさ?) 一番思ったのは時間的なしんどさかなと思う。子どもとのやりとりや授業の達成感とかもあったが、拘束時間(準備、帰宅後にも授業や子どものことを考えたり)、学校にいる時間以外も学校のことを考えているということと、勤務内容的に休憩がない、学校にいるあいだはずっと子どもと接していなければいけない、休憩的な意味での勤務時間内での制約、仕事のメリハリのなさ。
N6:	自分は海外には興味があり、海外に関わる仕事を考えたときに、教員以外でもできるのではないかと。在外の教員のような働き方もできるかとは考えたが、日々もつと、英語を「教える」ではなく「使う」立場になれないかと。一般就職から教員は目指せるがその逆は難しい(選択の幅が狭まる)。そこで大学の新卒枠は一般就職で使おうと気持ちが固まった。 (報われそうな程度で教員でも同じぐらいだと思うか) …難しい…子どもとの関係という点では報われそうだと感じる…自分の時間を使って行った準備が授業や子どもとの関係性においてプラスにはたらくという点では報われるが、事務作業とか子どもと関わる以外の部分は、ただの「仕事を引き受けてくれる人」みたいなことになるのかなと。
N7:	子どもと関わることは実習のなかで充実していたが、「教える」など教師の中身を経験して、好きだけじゃ成り立っていない部分を感じた。やりたいという気持ちもあったが、現実味が遠ざかっていき、憧れっぽくなった。 指導案を作ったり授業をするというのが、自分のなかで初めてということもあって、すぐ時間がかかった。生活も、ふだんの生活と違いすぎて、これを仕事にするにはとかいろいろ考えてしまった。

考察

1. 教職選択者が教職選択に不安を抱く経緯

Table 2 に挙げられた、教職を選んだ者であっても教職選択に感じた不安から読み取れることは、4名いずれも、教師になることをさほど強く決意せずに、あるいは具体的に知らない状態で入学していることである。「教育に興味があったので『受けてみよう』くらいの」「資格があった方が安定して職に就ける」「学力に合うところ」「『なれたらいいかな』ぐらいだった」という記述が見られる。確かに本学は国立大学ゆえの一定の知名度もあり、学費は私立大学より安く、県内や近隣府県からは自宅通学も容易という点で、仮に教員志望でない者にとっても好都合な点はある。本学教育学部において入学者に悉皆で行った非公開の調査結果報告(直近5年間)において「本学へ入学した理由」を択一式で尋ねた結果では、「教職をめざしているから」という選択肢があったにもかかわらず、「入学難

Table 7 教職以外の選択者におけるその業種・職種・企業を選んだ理由

N1:	<p>中学のときに、友だちと「将来社長になりたいよね」と話していて、自分もそういう生き方をしたいなとずっと思っていた。そういう道と教師と両方あって、教師にならないと思ったときにその道を考えて。(なぜ社長になりたいという志向性がある?) けっこう自由に生きたい。自分のしたいことをしたい。自分のしたいことならいくらでもできる。そういう生活の仕方や考え方に合っているんじゃないかと。</p> <p>まずはお金の勉強とかをしたいと思って、それが学べるのが仕事のなかでは金融系かなと。</p> <p>なかでも証券の方が人と関わる機会が多そうだったので(人と関わるのが苦にならないとか好きだとか?) はい、けっこう好きで。会社自体を選んだのは、その会社が一番、お客さんを大事にしているというか、利益よりもお客さん重視な会社だったので、儀式的には「お客さんに喜んでもらう」ということがけっこう軸だったので選んだ。</p> <p>自分がほとんど知らない世界なので、自分が熱心に勉強し続ければ毎日学べるのがたくさんあると思って。逆に学ぶことがなくなったときにはやめようかなと。</p> <p>(「自分の頑張りを認めてもらえそう」とは具体的には?) 結構単純な話で、営業とかでお客さんをとれたりしたら、こういう企業だと成果報酬がもらえたりできるので。</p>
N2:	<p>(教師より事務職がいいと思ったのは) 小中学校のときから「自分はサポートする方が向いているんだろうな」と思う部分があるので、そういう点で事務職にやりがいを感じそうだなと。(事務職を選んだ理由は他に?) 消去法…営業はできないなと…自分が長く働きたいと思ったときに、事務職が無理せずに長く働けるかなと思ったこと。(教師の場合はこの「無理せずに長く働ける」ということに黄色信号を感じる?) はい。自分の性格上なんだけれど。</p> <p>自分の高校までの友だちは民間就職で、大学の、教師を目指す友人は真面目で目標があって、自分にない特徴だなと思う。(どっちの人と気が合うかという、高校時代までの友人だと?) はい。</p> <p>事務職であっても昇進できるところなので、自分が頑張っただけ評価されるということ。</p>
N3:	<p>ずっと塾の講師アルバイトをしていて、教育の業界にはいたいという気持ちが強かった。アルバイトでそのまま…ということではあるが、そのアルバイト先にやりたいことがあったので。</p> <p>(「報われそう」と言う予想はどこから?) 単純に講師の経験として、その子の志望校や点数の目標が達成できたときにとても嬉しかったことがあったので。</p> <p>(「楽しく働く」とはどんなイメージや条件が?) 第1は「やりたいことがやれる」(自分の思う「教育」がやれる)かなあ。</p>
N4:	<p>自分のしたいことは、アホなんだけど、自分がいい家に住みたいとかいいクルマに乗りたかった。教職でしか「誰かを支える」ということも、対象が子どもから大人に変わるだけなので、お金の面と「誰かを支える」が教職と共通していると考えた。(なぜ「銀行・営業」?) 支える対象が広がったということと、説明会やインターンで出会った社員の人柄もある。銀行の人たちは「受け入れてくれる感じ」。教育実習では厳しいことも言われた。</p> <p>(「報われそう」とは給与?) あとは動かすお金の額も大きいので、喜んでもらう顔も見られるのかなと。</p> <p>インターンシップのときについてくれた人事の社員が、「あなたが入社したときのキャリアを一緒に考えていきたい」ということで、細かな業務理解を説明してくれたこともあって、内定をもらう前段階で10年先までのキャリアを具体化できていた。インターンシップで業務体験もしたし、自分が目指すキャリアの社員から話を聞くことができた。</p> <p>(どうい仕事なら楽しめそう?) 刺激がある、自分がこれまで経験したことのないような、知らない世界を歩めること。</p>
N5:	<p>教員の安定感のようなことも…重視していたので教員でないなら公務員かなと思っていた。だがいろいろ調べているうちに「せつかく教員にならないならチャレンジしてみようかな」と思った。それが「営業職」。仕事の成果によってインセンティブもつような仕事をやってみようと思った。</p> <p>(自分はその職業でうまくやっていけるだろうという見通しはどこから?) インターンシップもやるなかで「なんとかなるかな」と。(印象的なできごとなどがあったか?) 自分に合っているかというよりは「これから努力しなきゃいけないかな」ということ。教師みたいに「合っていない」と思わなければ頑張れるかなと。</p> <p>自分の親も営業職なので、「しんどい分だけそれに合うものがある職業」というと自分のなかでは営業職。「しんどさ」には親を見ていてある程度わかるし、「インセンティブがある分、やりがいもあるのかな」と。</p> <p>本社の職場を見たときに「ここがいいな、やれるな」と思った。一番良かったと思うのは、社員のやりとりが、仕事に必要なもの以外の会話がなされていて(教員はその点、人情味が感じられるものはあった)、ここならしんどいことがあっても助けてもらえるだろうなと感じられた。端的に言う「職場の雰囲気」。</p> <p>営業職では自分が頑張っただけ…バカっぽくいうとタワマンに住めるのかなと。将来の自分を思って、将来性があると答えていた。</p> <p>今の職場は教員や営業職と違って、ゆるさがある。仕事はあくまで仕事で、あとは自分の時間というように区切りを入れてワークライフバランス的なところは重視している。</p>
N6:	<p>自分は海外には興味があり、海外に関わる仕事を考えたときに、教員以外でもできるのではないかと。在外の教員のような働き方もできるかと考えたが、日々もつと、英語を「教える」ではなく「使う」立場になれないかと。</p> <p>(「得意なことや長所を生かして働けそう」は英語のこと?) そう。あとは自分は長期的に何かをやるとかひとつのことを極めるというのが自分のなかでは得意だと思っていて、働く会社も自分の裁量が大きいとか…自分が携わる職種も「経理」とわかっているもので、それもひとつのことを極めたいという点と重なって良かったのではと。</p> <p>受けていた会社があった東京で働くのも楽しそうだなと。慣れた学校のなかで働く教師よりも目新しいということはあった。「自分でやらせてもらえる」や「一つの仕事をずっとやっていける」という方が自分に向いている感じがあった。</p>
N7:	<p>企業を探していくときに、「会社の中身を見ながらというのでもいいが、人を見て選ぶ方もある」と聞いて「誰と働きたいか」を大事にしたいと思った。</p> <p>(その福祉関係の施設がいいと思った?) いろいろな理由を抱えている子どもたちを…保育士の実習を通して見ていたら、その子たちにできることを探したい、ということくらい。</p> <p>(気になっていた会社は何を気に入って?) SNSの投稿を見ていたりして、会社の人たちとやりとりしている関係性が楽しそうに見えた。</p> <p>本社を見学させてもらって、人事や広報の人たちと話をしてみて、自分のやりたいことが見つかったので気持ちが固まった。</p> <p>「お客さんのコミュニケーションをとることが多い」現場に興味があった。お客さんが希望して来る場所で、そういう人たちとコミュニケーションを取りたいと思った。「自分が全く経験がなく、想像ができないところ」は(エントリーシートを出す企業からは)退けた。</p> <p>自分がいく会社にはインセンティブ制があり給与にも関わるので、それも含めて毎日刺激があるのではないかなと。</p> <p>自分も同じ業種の会社にお客として通っていたこともあったので、自分の経験なども含めてお客さんに伝えられればいいなと。</p> <p>仕事以外のプライベートを考えていることと、客の評価から自分の実績がわかるので成長していきやすいという点。</p> <p>これまでの4年間とは全く違う視点・環境で働くということがあって、同僚や上司などその業務に関する知識や興味をもっている人と関わるのは、新しい話題に触れることで楽しく働けそうだと。</p>

易度・受験科目から」や「国立大学だから」がそれぞれ10～20%を占めるという少なくない割合であった。

そのように教職を目指すことが第1の理由でない場合、教育実習前に子どもや現実の学校教育に触れる機会は大学が用意した最小限のものだけであるため、当然ながら不安や迷いも少なくないであろう。ただし、こうした人たちも結果的には教職を目指す意思決定をしていることから、それらの不安や迷いは必ずしも教職選択を阻害するとは言えない。これまでの教職志望意識や教育実習の研究では、実習後に志望の気持ちが強くなるという報告が多くある（例えば林，1991；坂井，2005；児玉，2012）。つまり実習で教師の仕事の具体が実感をもって感じられ、肯定的な見通しが得られれば、事前の不安や迷いは関係なく教職志望意識が高まるということであろう。

次に教職選択者が教育実習後に教職に対して感じた不安（Table 3）からは、3名のみの回答であったが、いずれも教師のすべき仕事量が多いことと関連したものである。こうした実際の職場や仕事を入職に先だって見聞・体験することは、Realistic Job Preview（Wanous, 1992）と概念化され、自分がその仕事に本当に向いているかどうかを改めて考えさせる「スクリーニング効果」、困難を承知でその仕事をやり遂げたいという強い仕事欲求を醸成する「コミットメント効果」、過剰な期待を冷まして入職後の幻滅を抑制する「ワクチン効果」があると言われる。見聞きした印象は否定的なものであっても、結果的に教職を志望し、維持する方向に作用することがある。

ところでT2のように、同級生と自身を比べて教師としての適格性を意識することは、これまでも指摘されている（小林，2005；久保，2011；若松・古川，2022）。このケースのように、自分より優れた他者に対して異質視する比較は上方比較の対比過程と呼ばれ、自尊感情を下げる作用がある（高田，2011）。さきのRealistic Job Previewと併せて、いずれも志望意識を一時的に低下させる作用はあるが、観念的・抽象的な自己理解や進路情報を現実的・具体的にする啓発的経験の機能がある（篠，2007）。彼らがなぜ、こうした不安を持ちながらも教職を選択したかを次節で検討する。

2. 過酷とされる教職を目指す背景

そもそも教職は業種＝職種の職業であり、見聞きし体験したこともあって仕事内容は十分に明瞭である。佐藤（1998）が指摘した「教育という文化的実践の『創造性』と個人の人生に関与し公共の幸福に貢献する『倫理性』（人道性）」もわかりやすい魅力と言える。それに加えて、Table 4によれば、子どもとふれ合い、教えるなどの達成経験を得て教師の職務遂行に関する効力感が高揚（Bandura, 1977）して、自分の授業準備や子どもとの関わりに手応えを得たことが推察される。当初は思い通りに進まない授業や指導が入らない子どもとの関わりも自分の努力や工夫で改善できたという思いは、子どもの成長に立ち会えた喜びと、有能さ・自律性・関係性の3つで構成される基本的心理欲求（Ryan & Deci, 2017）を満たすものでもあったろう。苦勞して手に入れた成果という不便益（川上，2017）も関連しているかもしれない。尾高（1941）が整理した職業の三要素に関しても、「生計の維持」に加えて「個性の発揮」「役割の実現」のいずれをも満たす職業であると感じられたとも言える。

これらの魅力や手応えが教育実習などのなかで感じられ、心的報酬として機能することで強化子となって動機づけられ、仕事の多さや勤務時間の長さが気にならなくなることはあり得る。教師の仕事を自分が行うことで、金銭的報酬が十分なものであるかよりも、手応えとして子どもから良い反応が得られる手段として自律的に動機づけられ、あるいはそれに取り組むこと自体が楽しくなる内発的動機づけが作用したと考えられる。

教師の職務がもつ上述の特徴からは、本田（2008）の「自己実現系ワーカホリック」も危惧される。本田は、本人が自分から進んで働きすぎにはまっていくなか4つのことを挙げているが、教師の仕事にもそれぞれ関係しうる。まず①「趣味性」は「好きなことを仕事にできる」というものだが、仕事を趣味的に捉えている発言も複数の人から聞かれた（Table 5）。②「ゲーム性」は効率性や収益性を競うというもので、業績給ではない教職の場合であっても部活の指導や授業で子どもを少しでも楽しませる、理解させることを目標と捉えると、この特徴も関係すると言える。次に③「奉仕性」

はまさに教職で問題になると言える。江澤（2020）が「私たち教師は『子どものため』であれば、何でもしてやりたいと思ってしまうのです」と述べているように、社会的にも望ましいとされる利他的な志向性は、ともすると働きすぎにつながるだろう。最後の④「サークル性・カルト性」とは、高揚した雰囲気に飲み込まれて仕事にのめり込むというものだが、Table 4のT4、T7、T8に見られるような一体感や共感してもらえたという親和性は、それと近いように思われる。若松・矢田（2021）の調査においても、教職を想定している学生はそうでない学生より労働条件を相対的に軽視していた。とすれば、働きすぎの傾向が再生産される方向で教員志望者が生み出されると言えるかもしれない。

上にも述べた実習先の先生や教職志望の同級生との交流や励まし合いは、志望意識を高めることにも寄与していた。その人たちと同じ職場で働けるわけではないものの、「教師を仕事にする人がこういう人たちなら話が通じるだろう」という推論によるものであろう。上述した仕事上の手応えだけでなく、こうした「居心地」に関わることも意思決定理由として見逃せない。Super（1969）が理論化した「職業適合性」は「能力」と「人格」の大きな二側面から構成されているが、前述した達成経験や効力感「能力」側面に、上記の居心地の良さは「人格的」側面に含まれると考えられる。とすれば、双方の側面において教職が自分に合っていると感じられることは、志望意識も強固になることが予想される。過酷とされる教職を目指すこととこうしたことが関係するのではないだろうか。

3. 教職を目指さずに他の職業を選択した人の背景

こうした多大な魅力を教職に感じる人がいる一方、教職以外の選択をした人たちがなぜ教職を選ばなかったか（Table 6）に目を向けると、ほとんどのケースで、間接的のものも含めて労働環境の問題が関わっていた。本研究の対象者が教員を目指すか否かで迷った人であったこともあってであろうが、目指していた魅力的な進路が以前から他にあるというケースはなく、教職に対する失望や負担感がまず先に立っていた。N5やN7のように実習等でうまくできなかったという負の達成経験を伴うケースもあったが、N1やN3のように教育に熱意をもった学生やN2のように責任の重さを自覚した学生など、期待できる人材の喪失とも言えるケースも見られた。このように、教師の仕事内容や同僚（になるかもしれない人たち）にもつ負の評価は、実際に教職に就いた場合には課題の克服に努力を要し、周囲との協調にも忍耐を伴うとの推測につながり、労働時間や仕事量などの労働環境自体の認知も相乗的にネガティブになるのではないか。教職に就く人を減らさないためには、この意味でも、教師の労働環境の改善が重要と考えられる。

N1やN3のように教員の仕事に大きな気負いや期待をもつことはバーンアウトのリスクを高めることから、教育実習での見聞や体験を経て進路変更することは、先にも述べた Realistic Job Preview のスクリーニング効果の作用としてあってよい。しかし必ずしも進路変更をするばかりではなく、その気負いや期待を現実的な性質や水準に調整していくことも可能なはずである。あるいはその意味で現実的でない気負いや期待を現職教員は自らの経験の中でどのように落とし込んで納得してきたかについて、たとえば教育実習の事前・事後指導として、現職教員の経験をもつ実務家教員などによる支援が考えられる。そもそもN1やN3など、一部の人の関わりをもとにして教職ないし教師として働く人たちに対して負の評価をもつことは、その妥当性の点でリスクがあるであろう。事後指導やその後の大学生活において多くの教員経験者や同級生と交わることで、働く上でのモデルに出会うことができれば、予期的社会化（Merton, 1949）も進むと推測できる。

教職以外の職業をどのような理由でより良いとしたか（Table 7）では、まず教職と対照的なことでは「成果に応じた報酬」が挙げられる。このことから、教職の希望者を減らさないためには、教師への金銭的処遇は見直されるべきと言える。前述の教職選択者では、教師の仕事自体の魅力や子どもからの手応えという心的報酬がそれに代替していると考察したが、そうならない人となる人がいるという個人差の由来は本研究での結果からいくつか想像することはできる。たとえば入学当初から教職に興味を持てなかったこと、あるいは教育実習がうまくいかず、効力感が高められなかったこと、あるいは実習先の教員や同級生たちとの交流のなかで教師（を目指す人たち）と話が合わない、価値

観が異なるなどの違和感を感じたこと、あるいは働くことを別なこと（生計を立てることや趣味など）の手段と考えており、実質的な労働時間の長さや残業時間が給与に反映されないことが大きな痛手と考えていること、などである。

また教職の選択とも共通することでは、携わる職務が具体的に見えたこと、従業員に対して親和性を感じたことが就職先の選択と関わっていた。前者は仕事内容に動機づけられるためには必須であろう。筆者が行った過去の面接調査（若松, 2008）でも、「自分が働いている姿が想像できること」が意思決定を推進していた。また後者は前述の「居心地」に関わることである。いずれも就職活動を継続して業務や職場への接触を重ねないと把握できないことであり、教職を志望しない判断が就職活動に先行してなされたならば、その理由は上記の二点とは別のことと考えられる。本研究の調査で得られた回答からは、前述した教師の労働環境の問題を指摘せざるを得ない。

教職以外の選択者にはまた、教職で実現しようとしていたことが他の職業でも実現できると考えた人たちが複数いた（N2、N4、N6）。教職を選択する人たちは、教師の仕事の「内容」に惹かれる傾向が Table 4 や Table 5 から見てとれるが、他方、働くことを「手段」と考える人は教職以外の範囲で模索していた。進路意思決定のあり方としてはどちらもあって良いことではあるが、教職以外の選択に目が向いた契機が、教師の労働環境が悪いという判断に端を発している可能性もあり、教師を目指す人をできるだけ多くするためには、労働環境の見直しは重要であると考えられる。

4. 本研究の制約と今後の課題

依頼に応じて調査に協力してくれた人たちからデータを得たが、教員養成学部生からのサンプルとして偏りが懸念されることが制約として挙げられる。自分の意思決定や判断とその理由について一定の確信をもち、その経緯や理由を大学教員である筆者に話してよいと感じた人たちであろう。対象者にならなかった人のなかには、外的要因のために教師は目指せなかった人（例えば自宅で家族の看護・介護にあたるために教師の長い勤務時間は物理的に無理な人）や、理由を話せるほど整理された理屈で意思決定を行わなかった人、働くことへの動機づけが低い人などがいたかもしれない。

また、キャリアの問題には避けて通れないジェンダーの要因を、この調査ではとくに取り上げなかった。自分の性別のために地元での就職が必要と親から言われていたり、企業では女性が働きにくいために教職がいいと思ったりといった回答は、対象者たちの発言には聞かれなかったが、聞かれなかったから言わなかった、あるいは言いたくなかったという事情があったかもしれない。

残された課題としては、教職以外の選択者が、業種や職種も多様なためであろうが、個人による差異が大きく、こういう人たちであるとしてまとめられなかった部分があることである。例えば上昇志向の人と無理なく働くことを重視した人がいた。また確信的に選択した人と「まずはやってみる」と試行的なスタンスの人もいた。新奇な環境に興味を示す人も経験済みの環境から選んだ人もいた。こうした多様性に留意しながら、両者の相違をさらに究明することが課題である。

文献

- 朝日新聞（2019a）. 残業月 177 時間、手取り 18 万円 先生は使い捨てか 2019 年 10 月 28 日.
 朝日新聞（2019b）. 教員のなり手が減少 「ブラック職場」敬遠、対策も後手 2019 年 10 月 7 日.
 朝日新聞（2023a）. 教員の処遇改善に重点、少子化対策は記載見送り 「骨太の方針」原案 6 月 8 日朝刊.
 朝日新聞（2023b）. 授業数や行事 見直し提言 文科省有識者会議 教員の負担軽減を図る 8 月 29 日朝刊.
 Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
 江澤隆輔（2020）. 先生も大変なんです いまどきの学校と教師のホンネ 岩波書店.
 林 孝（1991）. 教育実習経験と教職志望意識の形成に関する一考察 広島大学教育実践研究指導センター紀要, 3, 11-22.
 本田由紀（2008）. 軋む社会 双風舎
 川上浩司（2017）. 不便益という発想 インプレス.

- 小林淳一 (2005). 教員養成系大学・学部における非教職志望者の教職観・進路意識に関する事例研究－大学生の教職課程履修経験に関するエスノグラフィー－ 兵庫教育大学 学校教育学研究, 20, 115-128.
- 児玉真樹子 (2012). 教職志望変化に及ぼす教育実習の影響過程における「職業的(進路)発達にかかわる諸能力」の働き－社会・認知的キャリア理論の視点から－ 教育心理学研究, 60, 261-271.
- 久保順也 (2011). 初等教育教員養成課程における学生の教職意識の形成プロセスに関する縦断的研究 (3), 宮城教育大学紀要, 46, 193-202.
- 教員養成のフラッグシップ大学検討ワーキンググループ (2019). 大学の教員養成に関する基礎資料集 https://www.mext.go.jp/kaigisiryu/2019/05/_icsFiles/afiedfile/2019/05/21/1416597_10.pdf 《2023年6月9日取得》
- Merton, R. K. (1949). *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*. New York: The Free Press. (森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎 共訳 1961『社会理論と社会構造』みすず書房)
- 尾高邦雄 (1941). 職業社会学 岩波書店
- Ryan, R. M. & Deci, E. L. (2017). *Self-Determination Theory: Basic Psychological Needs in Motivation, Development, and Wellness*. NY: The Guilford Press.
- 齊藤ひでみ (2019). 教師の定額働かせ放題＝「給特法」問題はいかにして広まったか 現代思想, 47 (7), 63-73.
- 坂井裕 (2005). 教育実習終了後における教職志望の変容－数学科の教育実習生を対象として－ 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要, 1, 81-95.
- 佐藤 学 (1998). 教師というアポリアー反省的实践へ 世織書房
- 篠 翰 (2007). 進路指導・キャリア教育の諸活動 吉田・篠著 進路指導・キャリア教育の理論と実践 (pp. 49-75.) 日本文化科学社.
- Super, D. E. (1969). 職業指導研究セミナー報告書 日本職業指導協会
- 高田利武 (2011). 他者と比べる自分－社会的比較の心理学－ サイエンス社.
- 若松養亮 (2008). undecided 型の進路未決定者に対する意思決定支援プログラムの開発と評価 平成 17～19 年度科学研究費補助金 (基盤研究 C) 研究成果報告書
- 若松養亮 (2017). 教員養成学部 4 年次生における教職の選択・棄却の意思決定 滋賀大学教育学部紀要, 67, 219-229.
- 若松養亮・矢田陽美 (2021). 教職志望者における労働条件の相対的軽視－就業動機と性差にも着目して－ キャリア教育研究, 39, 29-39.
- 若松養亮・古川真実 (2022). 教育実習による教職志望の変化と実習生間の相互作用の関連－教員養成学部生の場合－ 滋賀大学教育実践研究論集, 4, pp. 115-122.
- Wanous, J. P. (1992). *Organizational Entry: Recruitment, Selection, Orientation, and Socialization of Newcomers*. Addison-Wesley.

【付記】本研究は科学研究費補助金 (課題番号 19K03228) の支援を受けています。また、協力くださった調査対象者のみなさん、各専攻で被推薦を検討いただき、お知らせくださった滋賀大学教育学部の先生方に厚く御礼を申し上げます。